
河童戦記～時太郎の章～

万墨人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

河童戦記〜時太郎の章〜

【Nコード】

N2739N

【作者名】

万墨人

【あらすじ】

『河童戦記』第二部。時姫の息子、時太郎は河童淵で少年に成長した。が、河童淵に人間の手が伸び、時太郎は母親である時姫を探す旅に出る。時姫は、京の【御門】に掟われているという……。旅を続けるには、仲間が必要という予言はどういう意味なのか？はたして時太郎は、母親と巡りあえるのであろうか？

喧嘩

「謝れっ！」

「いやだっ！ 何で、おめえに謝らなければならねえ？」

「おれを？土掘り？と呼んだろ。おれは、河童の時太郎だ！」

「嘘だ！ おめえは？土掘り？だ。なんで、おめえが河童の一人であるもんか！」

畜生っ！ と叫んで、陽に焼けた真っ黒な肌の少年が、濃い緑色の肌をした同じくらいの年頃の河童に飛び掛かった。

たちまち取っ組み合いが始まる。

周りには、年頃も様々な河童の少年たちが目を輝かせて二人の喧嘩を見守っていた。

取っ組み合っている二人は、下帯一つの、ほとんど裸である。地面は濡れていて、二人の身体はすぐ泥だらけになる。

陽に焼けた少年のほうがやや体が大きく、体重も上回っているようだ。対する河童の少年は、ひよろひよろに痩せていて、とても相手になるような体格ではない。

が、二人の勝負は、ほとんど互角のようだ。

いや、河童のほうがやや優勢になっている。たちまち陽に焼けたほうを組み敷いて、腕を擦り上げる。尖った口先を相手の耳もとに近づけ、ゆっくりと言い聞かせる。

「おめえは？土掘り？だよ。おめえに【水話】ができるか？」

勝ち誇ったように、にたりと笑った。

腕を擦じ上げられている少年は、利かん気そうな表情をした、人間の男の子だった。【水話】ができるか、と尋ねられ、悔しそうな表情を浮かべる。

「だけど、おれは、お前らの【水話】を聞き取ることができるぞ。？土掘り？に、そんな芸当、できるのか？」

へっ、と河童の少年は笑った。腕を離し、とんと肩を叩いた。

「それが？土掘り？じゃねえ証拠にはならねえ……。おめえに、おれたちの？皿？があるか？背中の甲羅は、どうだ？なんにもねえ！おめえは？土掘り？だよ。時太郎ちゃん！」

捲し立て、けらけらと甲高い笑い声を上げる。周りの河童たちも、からかいに唱和して笑い声を立てた。

畜生……と、時太郎と呼ばれた少年は両拳を固めた。顔を真っ赤に染め、怒りを堪^{こら}えて、その場を立ち去る。

河童の甲高い笑い声は、いつまでも続いていた。

河童淵

ここは、河童淵。その名称の通り、河童たちが仲良く暮らしている。

中央にはこぢんまりとした静かな沼があり、沼には細い川の流れが注ぎこんでいて、また別の方向に繋がっている。川の上流には、滝があった。

沼の周囲は切り立った崖で、ほとんど垂直な崖面は人間の接近を困難にして、河童淵の存在を隠している。

沼の水面には所々、岩が突き出していて、そこには思い思いに河童が腰かけ、のんびりと胡瓜や真桑瓜や西瓜や香瓜メロンを齧っている。

高い岩からは、河童の少年たちが勢いよく水面に飛び込み、水飛沫を跳ね上げていた。

日当たりの良い場所には小さな畑ができていて、そこには胡瓜や真桑瓜、西瓜、香瓜、赤茄子トマト、甘味唐辛子パプリカなど、様々な野菜が栽培されている。

野菜を世話しているのは河童の女たちだ。河童の女は男と違い、色は白く、頭の皿もほとんど見分けがつかないほど小さい。

男は灰色がかった緑色の肌で、子供のうちは濃い色をしている。年令を重ねるうちに、灰色に肌の色が薄まっていく。年寄りの河童は、髪も白く脱色して、まっ白な色合いになっている者も多い。

時太郎は、水の中にいた。

【水話】

時折、こーん、こーんという音が水中から聞こえてくる。

河童の【水話】なのだ。この【水話】を使って河童たちは水中の様子を？見る？ことができる。

こーん、こーんという単調な音が、きゅきゅきゅという急調子に変化した。おそらく、水中の獲物を探しているのだらう。

時太郎のやつ、また喧嘩ふっかけてきたな……。

馬鹿なやつ……？土掘り？のくせして、河童の力に敵うわけねえのにな！

けけけけ……と【水話】で河童たちは会話をしている。

明らかに、水中にいる時太郎に聞かせる狙いだ。どうにも堪らなくなつて、時太郎は水中から顔を出した。

ざばりと水から上がると、いつもの自分の場所に腰を下ろした。

ここは昼間中、日が差して暖かい。

河童は暑さが苦手で、あまりここには来なかった。そのため、時太郎専用の場所となっていた。

頭の中に？土掘り？という言葉が木霊していた。

？土掘り？とは、河童が人間を馬鹿にするときの呼び方である。河童淵に近い村で、人間が一生懸命に畑を耕している姿から、そう呼んでいるのだ。

時太郎は腰かけている場所から、沼の水面を覗き込んだ。水面に、自分の顔が写っている。

ぼさぼさの蓬髪。眉は太く、四角い顎の形をしている。両の目元にはつきりと判る痣があり、それが時太郎の表情に形容しがたい迫力を与えていた。一年中、ほとんど裸で暮らしているため、肌は真っ黒に日焼けしている。

いったい、自分は河童なのか人間なのか……。

お花

生まれたときから時太郎はずっと、この河童淵で過ごしてきた。周囲の大人の河童の話では、父親の三郎太が十何年前かに、赤ん坊の自分を連れてきたという。

だが、詳しい事情は、誰も知らないらしい。父親に尋ねても、言葉を濁して話したがらない。

おれは河童だ！

時太郎は強く思った。

河童の【水話】を聞き取ることができるし、河童ほどではないが、人間には真似できないくらい水の中で息を止めていられる。泳ぎだって得意だ！

水面の下で、銀色の鱗が煌いた。それを見てとった瞬間、時太郎の右腕が反射的に動いていた。

ぱしゃん、と水音がしたと思ったら、時太郎は右手で魚を捕まえていた。

びくびくと動く魚に時太郎は歯で齧りついた。ぐいっと食い干切り、もぐもぐと口を動かす。

たちまち一匹を平らげ、残った骨をぱいと水面に投げ棄てた。ぽちやりと音がして、ゆらゆら魚の骨は水面に沈んでいく。

ごろりと仰向けになり、頭の下に両腕を組んで枕にする。

ぽかんとした青空が広がっている。その青空に、にゅつとばかりに、女の子の顔が現れた。

細面で、きゅつと吊り上がり気味の大きな瞳が時太郎の顔を覗きこんでいる。髪の毛は頭の皿を隠すように天辺で束ねていて、どこかで摘んできたらしい百合の花を飾っていた。

お花であつた。河童の女の子である。

肌は人間の女の子のように白く、血色のいい頬が薄桃色に染まっている。河童の女の子は、見かけはほとんど人間の女の子にそっくりだ。背中に小さな甲羅があるが、着物をまえば判らない。

胸と腰を覆う、僅かな布切れがお花の身につける全てである。だが、年長の河童の女たちは、そんなもの身につけていない。ほとんどが裸で暮らしている。

お花のような、若い女の子の河童たちは、人間の娘の身につけるものに興味津々で、それらを真似しているのだ。

好奇心

お花は、にっと笑いかけてきた。

「どうしたの、時太郎。面白くなさそうな顔してんのね」

時太郎は上半身を起こし、けつと肩をすくめた。

「面白くなさそうな顔って、どんな顔だよ！ 面白い顔って、こんな顔か？」

手で頬を掴み、ぎゅっと引っ張り、目を寄り目にさせる。

くつくつとお花は忍び笑いをした。

「また喧嘩したんでしょ。あんたも懲りないわねえ……」

「ほつとけ」と呟いて、時太郎は立ち上がった。お花は時太郎の腕を掴んだ。

「ね、お山へ行つて見ない？」

「お山？ 何しに？」

お花は、辺りを見回すと、そつと囁いた。

「？土掘り？が来てんのよ」

「え？」と時太郎は問い返した。

「何のために？ お山は約定で？土掘り？が入っちゃいけない、ってことになってるんだろ？」

「それが、見かけない連中なの。この辺りじゃ、見たことない顔よ。あたし、見たのよ！ ほら、この百合……」

お花は、頭に飾った百合の花を見せ付けた。

「これを摘みに行った時、見かけたんだって！ 絶対、あの連中は、怪しいわ！」

お花の話に、時太郎の好奇心は、むらむらと入道雲のように膨れ上がった。面白そうである。

「うん」と時太郎はお花に向け、うなずいた。

「行こう！」

お山

河童淵を取り囲む崖の裏側を河童たちは「お山」と呼んでいる。

海岸紅杉^{セコイア}が立ち並び、地面には雑草が繁茂していた。時折、ぱかりと開けた場所があつて、そこには四季の花々が咲き誇っている。

がさがさと下生えを踏み分け、時太郎とお花は山の中を歩いていった。

山の中をちよろちよろと細い小川が流れている。二人は上流に向かっていった。

「まだかい？」

時太郎の問いかけに、お花は短く答える。

「もう、ちよつと」

上流に向かうと、辺りはごろた石が目立ってきた。下生えが少なくなり、ごつごつとした岩が突き出している。

岩にぴたりと寄り添い、お花は時太郎を振り向いた。

「こつち」と口だけ動く。指を唇に当てている。声を出すな、というこらししい。

そうつ、と時太郎はお花の隣に並んだ。

いるいる……。数人の人間が歩き回っている。

百姓には見えない。

手甲、脚絆で手足をしっかりと固め、蓑笠を被っている。蓑笠には面隠しの直垂^{ひたたれ}があり、表情は読めない。背負子を背負い、手には錫杖を持って、山伏のようであった。腰には脇差をさしている。

「何してんだろう?」

小声で時太郎はお花に囁いた。

判らない、とお花は首を振った。

男たち

見たところ、何か探しているらしい。時々立ち止まり、地面に顔をくつつけるようにして小石を引っくり返したり、草を手折ってしげしげと見ている。

やがてお互いうなずきあった。

背負子を下ろし、中から何かの道具を取り出した。鋤のような形をしている。組み立て式で、手にしっかりと握りしめ、ぐさりと地面に突き刺した。

しばらく無言で、その作業を続けている。

やがて動きが止まった。

顔をあげ、お互い見合った。

「どうじゃ？」

「どうも違うようじゃ」

「わしも、そう思う。やはり、もそつと奥に分け入る必要があるな」

道具をもとに戻すと、斜面を登り始めた。

時太郎はもつとよく見たいと身体を乗り出した。その瞬間、ぱきり、と足が小枝を踏みしめた。

ぎくり、と男たちの動きが止まった。

「だれじゃ！」

さつと振り向く。時太郎と男たちの視線が、真っ正面から合ってしまった。

まずい、と時太郎は首を竦めたが、もう遅い。

ざざざざ……と男たちは飛ぶように斜面を駆け下り、あっという間に時太郎を取り囲んだ。

お花は……すでにいない。

時太郎は、どうしていいか判らず、立ちすくんでしまっていた。

嘘

男たちの緊張が僅かに緩んだようだ。

「なんじゃ、子供でないか」

「おぬし、どこから来た？ この辺りの童っぱかの？ 年はいくつじゃ？ 名前は？」

問いかける男たちの口調は、厳しいものではなかった。

「待てまで作蔵、そんな矢継ぎ早に尋ねるものではない。見ろ、怯えておるぞ」

どうやら男たちの一人は作蔵、という名前らしい。作蔵と呼ばれた男は、蓑笠の直垂を取った。

日焼けした、人のよさそうな表情が現れる。柔和な笑みが、目じりに浮かんでいた。

「済まぬ！ つい、急いてしもうたわい」

「お、おれ……時太郎……」

やつのことで、時太郎は自分の名前を告げた。うむ、と作蔵はうなずいた。

「時太郎、か。おぬし、この辺りに住んでおるのか？」

時太郎がうなずくと、作蔵は膝を折って、辺りの草を薙り、差し出した。

「このような草を、ほかでも見ぬか？ ぜんまい、わらび……そういった草じゃ。こういった草が沢山わさわさ生えておるところを知

つておつたら、教えて欲しいのじゃ」
さりげない口調を装っていたが、目は真剣だった。

「わしらは山菜採りよ！ この辺りの山は、まだ入ったことがないのでな。色々教えて貰いたいと思っているのだ。教えてくれれば、ちゃんと礼をいたすぞ」

作蔵の背後の男が声を掛けてきた。

俄かに時太郎の胸に不安が湧いてきた。

違う……、こいつら嘘を言っている！

理由もなしに、直覚する。

時太郎は、他人の嘘が判る。どんなに上手に喋っていても、時太郎には相手が本当のことを言っているのか、嘘を言っているのかすぐ判る。時太郎には？ 声？ が聞こえるのだ。

たっ！ と、時太郎は走り出した。

「あつ、待てというに……！」

背後から声が追いかけてくるが、無視して駆けていく。

ちらりと振り返ると、男たちは時太郎を凝視していた。さっきの柔和な眼差しは欠片もなかった……。

相談

男たちの姿が見えなくなると、ひょいと物陰からお花が現れた。

「時太郎、大丈夫？」

「お花！ ひどいじゃないか、さっさと自分だけ逃げちまうなんて！」

「御免ね……」と、お花は時太郎に並んだ。

「あいつら、やっぱり変だ！ 山菜採りなんて口から出任せの嘘を言ってるけど、ほかに何か狙いがあるんだ！」

時太郎の言葉に、お花は大きくうなずいた。

「あたしも、そう思う。ね、やっぱり、ここは長老さまに相談したほうがいいよ」

「長老さま」とお花が口にしたので、時太郎は目を丸くした。

「長老さまに……！ 本気か？」

お花は、こつくりとうなずいた。

長老

時太郎とお花は河童淵に戻ると、すぐ長老を探した。

沼を取り囲む崖には所々、穴が開いている。穴の一つ一つが河童たちの住処になっている。

長老の住まう穴は、沼を見下ろすやや小高いところに突き出した場所にあった。崖に刻まれている坂道を登り、二人は長老の住まいを訪ねた。

穴の入口には、太った大人の河童がごろりと横になっている。河童の周りには胡瓜や、魚が散らばり、手を伸ばして時々口に入れている。二人が近づくと、太った河童はじろりと見上げた。

お花は飛び切りの笑顔を作り、小首をかしげて話しかけた。

「こんにちわ！ 長老さま、いらっしやるかしら？」

河童は無言で頷くと、顎をしゃくつた。お花の笑顔には興味も一切ない、といった顔つきである。

お花は肩をすくめた。

二人が中へ入っていく時も、河童は再び胡瓜を齧っていた。

「あれで、長老さまをお守りする役目が果たせるのかしら？」

お花は気分を害したらしく、口を尖らせている。

「さあね」と時太郎は相手にならない。

長老の住まいは冷んやりとしている。穴の内側には、びっしりと苔が生えていた。

奥深くが一段ほど高くなっていて、そこには柔らかな枯れ草が積まれてある。枯れ草の中に埋もれるように、一人の老いた河童がちんまりと座っていた。

相当の年齢らしい。肌は真っ白に色が抜け、同じ白い色の髪の毛は全身を覆うばかりに伸びている。眉と髭も伸び放題になっていて、白い毛に全身が埋もれていた。

二人が近づいてきても、河童の長老はぴくりとも動かない。まるで置物である。

欠伸

時太郎は呼びかけた。

「あの……長老さま……」

ぴくりとも動かない。二人は顔を見合わせた。

お花は怖々、近寄った。まじまじと長老の顔を見つめる。

垂れた眉毛と、皿の周りを取り巻いている髪の毛に埋もれ、表情はまったく判らない。

ちろりと舌を出し、お花は唇を舐めた。腕を挙げ、指先を近づける。

「おい、やめろ」と時太郎は言いかけたが、お花はちゃん、と長老の身体を突つついた。

びく、と長老の体が震えた。

「ん？ ん？ なんじゃ？」

きよろきよると辺りを見回す。

指で眉毛を掻き分けると、やっと目が見えるようになったらしい。二人に気付き、ほっと溜息をついた。

「なんじゃ、お花か……。そこにいるのは、時太郎じゃな？」

ふわああ……と両腕を伸ばして欠伸をした。眠っていたらしい。

「良い気持ちで眠っておったのに、何事じゃ？」

「長老さま……おれ、お山で妙なやつらを目にしたんです」

時太郎はお山で目撃した連中のことについて話し出した。

ふむふむと長老は時太郎の話に頷いた。

時太郎が話し終わると、長老の態度は、それまでの薄ぼんやりとした様子から一変した。

「三郎太を呼べ！」

「父さんを？」

「そうじゃ、こういう場合、見聞が広い三郎太の知恵が要る」

長老は背筋を伸ばし、目を見開いていた。その視線は真剣で、一族を背負う河童の長老らしさが現れている。

「あたし呼んでくる！」

お花が立ち上がった。

知識

「そやつらは、せんまいわらび薇、蕨などを探していたのだな？」

頷いた時太郎を凝視しながら、三郎太は腕を組んだ。

お花に呼ばれ、三郎太は長老の住まいに姿を現した。三郎太の後ろに、河童淵の主だった河童が集まり、座り込んでいる。長老がついでに他の河童にも聞かせたいと、集めたのだ。

「それは、山師だ。金山を探していたのだ。山見立ての際、羊歯の仲間の草を山師は、まず最初に探すと聞いた覚えがある」

ぽかんとしている時太郎とお花に、三郎太は苦笑した。

「ああ、おまえたちは金きんや貴金属を見たことがなかったのだな。金パラジウムや白金ロジウム、巴金イリジウム、老金ルテニウム、衣金オスミウム、了金、我金という七金属は人間の世界で、最高の価値を持つとされるものだ。人間は、これら七金属のためなら、何でもする」

一気にまくしたて、はっと口を噤む。

時太郎は呆然となっていた。

父親の三郎太は時々こうなる。溢れ出る知識が忘我の状態となり、その時ばかりは時太郎は父が見知らぬ別人に見えるのだ。

その時、長老が口を挟んだ。

「この界限で、そのような草が目立つほど生えている場所というところ……」

河童たちは顔を見合わせた。

みな、同時にある場所が思い当たったようだった。

集合

「水虎さま……」

一人が呟くと、その場にいた全員が大きく頷きあつた。

「そうじゃ！ この辺りで、羊歯がわんさか生えているといえ、あそこしかないわい」

「あそこに人間が入り込むなど、許されることではない！」

「まったくじゃ！ これは何とかせぬと……」

河童たちは口々に言い合う。その言い合いが早口になり、甲高くなり、しまいには人間には聞き取れない高音域にずれこんでいく。

びりびりと長老の洞窟の岩壁が震動し始め、ぼろぼろと小さな破片が剥落し始めた。

「やめい！ みな、静かにせんか！」

長老の一喝に、ぴたりと静まった。

「ともかく、その人間どもの動向を探る必要がある！ 万一ということもある。水虎さまの場所に、皆を集めよ！」

長老の言葉に、全員立ち上がった。そろそろと出て行って、河童淵の全員に長老の言葉を伝えるに行く。

残された時太郎とお花に向かい、長老は笑いかけた。

「今度のことは、お前たちが報せてくれたのだから、一緒に水虎さまの場所まで従っていても良いぞ！」

時太郎とお花は「はい」と素直に頭を下げた。

塑像

河童淵の沼に注ぎ込んでいる川の上流には滝があった。その滝壺の付近に、水虎さまの塑像がある。というより、滝そのものが水虎さまの石像であった。

岩が偶然その形に固まったのか、あるいは誰かが滝の飛沫にもめげず、鑿を振るったのか……。高さ三丈にも及ぶ、巨大な河童の立像が滝の水飛沫を浴びて立っている。

日差しは傾き、山の背に橙色の残照が燃え上がっている。滝壺はとつぷりと山陰に入っていた。

「いるぜ……、あの三人だ！」

時太郎は岩陰に隠れ、お花に小声で囁いた。お花は時太郎の側に立って、唾を飲み込み頷く。

滝壺の、水虎さまの像の近くの岩壁に、三人が取りついて作業をしている。例の組み立て式の鋤を振るい、熱意を込めて土を掘り返していく。

ざくつ、ざくつという音が、滝の轟音に混じって聞こえていた。

時太郎の背後には、河童淵から集まった河童たちが集合していた。時太郎と同じように岩陰から顔を突き出し、滝壺の様子を見守っていた。

三人の姿に、河童たちの怒りに火が点いた。

長老は杖を手に、すっと立っている。眉が険しく、表情は厳し

い。

「長老さま、いかがいたしましょうか？ あのままでは……」

「うむ」と長老は頷いた。

河童たちに振り向き、にやりと笑いかけた。

「【水話】を使えばよい……」

音

長老の言葉を聞いて、全員が笑い返した。一人が口を開き、賛意を表わす。

「それが宜しゅうございます……あの？土掘り？どもに、一泡をば噴かせてやりましょう！」

河童たちは、さつと散開した。足音を忍ばせ、滝壺を取り囲む形になる。

長老の脇には、三郎太が立っている。その三郎太に、長老が話しかけた。

「三郎太、お前が合図を出せ」

三郎太は一步さつと前へ出ると、両手を喇叭の形にして口に当てた。

大きく息を吸い込む。

牟^む

ん！

三郎太の喉から、人間の耳には聞き取れない、低周波の音が放たれた。これを聞き取れるのは、河童と時太郎だけである。

音は滝壺に真っ直ぐぶち当たり、岩壁に反射される。

周りを取り囲んでいる河童たちの喉からも、同じ低周波音が放たれる。

牟 牟
ん ん
！ ！

河童の嘴の内部は空洞になっている。空洞の内側には薄い膜があり、これは音を反射させるが、声帯から発せられた音はこの膜で反射をくり返し、位相が揃う。つまり同期位相低周波音となる。
フオノン・メーザー

滝壺は、河童たちの低周波音波によって満たされた。

不安

鋤を揮う手を止め、三人は顔を上げた。
なにか異常を感じる。感じるが、それがなにか判らない。
ただ、不安だけが胸に込み上げてくる。

「なんだか、妙じゃの……」

呟くと顔を仰向け辺りを見回す。
ぎくり、と表情がこわばる。辺りに、濃密な霧が立ち込めていた。

「い、いつの間に……？」

滝壺は滝の水飛沫で水蒸気が過飽和にあった。その水蒸気は、河童の低周波音によって凝結し、霧と化したのである。

ぽとり、と手にした鋤を取り落とした。がちゃん、と鋤は地面に転がる。

と、その鋤が地面の上でびりびりと細かく震動していた。

「な、なんじゃ！」

三人は、あまりの異常に、衝動的に飛びのいた。
さっと脇差を抜き放ち、身構えた。

「な、なんだか、腹が妙じゃ……」

一人が自分の鳩尾あたりを撫で擦った。腹部の柔らかな脂肪がぶるぶると震えて、腸が捻れるような感覚が伝わってきた。

「うっ！」

もう一人は脇差を取り落とし、両手で耳を押さえた。

笑い声

悸^きいいいいん……。

河童たちは今度は高周波域を使ってきた。

もちろん、人間には聞き取れない。しかし、その影響は、確実に三人を襲っていた。

「わあっ！」

一人が目を真ん丸に見開き、無茶苦茶に手にした剣を振り回した。

「やめんか！ 危ない……」

言いかけた当の本人も、同じく目を見開き、剣を握りしめ、何も存在しない空間に切りかかる。

「わあっ！ く、来るな……！ た、助けてくれえ……！」

顔中を口にして、声を限りに叫んでいた。

三人とも、幻を目にしていた。河童の音による攻撃である。各々の目にしている幻は、それぞれ心の奥深くに潜む恐怖そのものであった。

ここは、水虎さまの聖域じゃ……。

霧の向こうから声が伝わってくる。

汗を滴らせた顔を上げ、三人は青ざめた顔を見合わせた。

「今の声を聞いたか？」

三人とも、がくがくと頷きあつた。

「に……逃げろっ！」

ひいつ、と悲鳴を上げ、三人は恥も外聞もなく、足を舞わして走り出した。

手にした道具は、そのまま放置し、ともかくこの場から離れること、それだけを念頭に駆けていく。

あはははは……。

追い討ちをかけるように、遠くから河童の笑い声が響いていた。

大広間

破槌城の大広間。一面板敷きで、無骨な梁が組み合わさり、緒方上総ノ介支配の家来たちが、ずらりと居並んでいる。

家来たちは無表情に口を噤み、板敷きに平伏している三人の山師たちを見つめていた。山師たちは、がたがたと恐怖に震え、頭を床に摩り付けんばかりにしている。

「河童の聖域じゃと！　それで、おめおめと逃げ帰ってまいったのか！」

甲高い怒鳴り声が大広間を圧した。広間を照らす灯明皿の火明かりがふわりと揺れる。

三人は、その声に顔を床に打ち付けんばかりに再び頭を下げた。

どすどすと荒々しい足音が近づき、三人の前に止まった。緒方上総ノ介の登場である。

かつての若者は、今や堂々たる国主となり、美々しい衣服を纏っているが、その性は今なお不羈不撓そのままで、癪癖はいよいよ強まっている。

上総ノ介は、この春ようやく、京に上洛を果たした。

放浪していた関白太政大臣の藤原義明を擁し、太政官を再建するという名目である。上総ノ介自身は、それ以前に橘氏を称しており、

いずれは征夷大將軍の宣旨を受けようと企んでいる。

そのためには、多額の金が必要。

樂市樂座や、征服した各地に代官を置くことにより経済的には潤っていたが、御所に巢食う公卿たちを転ばすためには、それだけでは足りない。もっと必要だった。

山師を雇ったのも、その一環であった。

家来

「なにがあつた？ 有り体に申せ！」

ははつ、と三人は這いつくばり、河童淵で起きた出来事を口々に口角泡を飛ばして奏上した。

上総ノ介は、黙って耳を傾けている。

やがて口を開いた。口調は平常のものに戻っている。

「それで、その場所に金鉱はあると思われるか？」

中央に這いつくばっていた一人が顔を上げた。作蔵であつた。

「それは、判りかねます」

むつ、と上総ノ介が不機嫌そうに額に皺を刻むのを見て、作蔵は慌てて言い重ねた。

「しかし、何かありそうだ、とは思われます。それが金なのか、銀なのか……それとも別の何かは判りかねますが……。お許し下され手前ども、ここに金がありますぞと、上様をお騙しすることは簡単でござる。しかし我ら、確かなこと以外、口にすることは山師の道にもと悖ると思っておりますので」

ふむ、と上総ノ介は愁眉を開いた。作蔵の正直な態度に好感を持ったようである。

「あい判つた！ 大儀であつた。後で褒美を取らせるゆえ、下がつてよいぞ！」

へへっ、と三人は這いつくばりつつ、その場を退出した。

どすどすと荒々しい足音を立て、上総ノ介は広間の壇に上がった。壇には緋毛氈が延べられている。どかりと座り込み、帯に挿した扇子を手にとり、ぱちりぱちりと開いたり閉じたりさせている。

脇息に凭れ、なにか考え事をしているようだ。

家来たちは身動きもしない。

「きとじんざえもん木戸甚左衛門はあるか？」

「ははっ、ここに！」と声がして、一人の家来が膝を滑らせ、正面に座った。

意見

かつて啄木鳥の甚助と名乗っていた男である。今は木戸甚左衛門と名を変え、上総ノ介の侍大将の一員となっている。時姫の一件で出世を果たしたのだった。

正式な家来となった現在では、かつての遊び人風の風体は改め、月代はきちんと剃って、青々とした頭を見せている。

「今の報告、そちは何と見る？」

はっ、と甚左衛門は頭を下げ、ちよつと首をかしげた。

「やはり幻術かと……」

ぱちり、と上総ノ介の扇子が鳴った。

「そちは以前には、素破、乱破を稼業としておったな。そのような幻術に、心当たりはあるか？」

「はて、幻術にも色々ございまして、それがしには、どのようなものか、ちと判別しかねます。しかし、幻術は幻術。打ち破ることはできましよう」

上総ノ介の顔が綻んだ。

「そちならば、河童の幻術を負かすことができると申すのだな？
面白い、では、そちに河童淵の探索を任そう。すぐに手勢をまとめ、河童淵に向かえ！」

はーっ、と甚左衛門は平伏した。

「では、早速に……」

膝を浮かし、退出する。

さつと上総ノ介は、手にした扇子をぱらりと開いた。

「者共、下がってよいぞ！」

その場にいた家来たちは次々と頭を下げ、退出していく。

藤四郎

「上様……」

上総ノ介は声の方向を見た。

貧相な顔つきの男が、上目がちに立っていた。細い顎。口元にはまば疎らな口髭を蓄え、唇からは、四角い前歯が覗いている。

「鼠か……何か申したいことがあるのか？」

その男は、まさに鼠そっくりな顔つきをしていた。髪の毛は若白髪に灰色に染まり、口元に蓄えた髭は、鼠のひげ髭のように疎らで長い。

さらには、口元から覗いた四角い前歯が、さらに男の顔を鼠そのものに見せていた。木本藤四郎であった。

かつて啄木鳥の甚助を家来にしていたが、時姫の一件で出し抜かれる形になり、同格の侍大将となつてからは、深く根に持っている。

「よろしいので、あのような胡乱な者を、このような重大な使命に……？」

くくつ、と悪戯っぽい顔つきになって上総ノ介は笑った。

藤四郎の真面目くさったしたり顔を見ると、つい若い頃の癖が出る。

「そちは、これがそれほど重要なものと見るのか？」

主人の意外な言葉に、藤四郎は呆氣にとられた。

「どういうことでござりましょう？」

「金鉱など、どうでもよい」

「えっ！」

「金鉱など、どうでもよいのだ。金が欲しければ、いくらでも方法はある」

「し、しかし、金鉱が見つければ……」

「そう……、金鉱が見つければ、確かに目出度い。しかし金鉱が見つかったとしてもじゃ、金を採掘して精錬するまで、手間暇がかかる？ その間、京の公卿どもは待ってくれぬわ！ ま、将来のために金鉱を探すのは良い。じゃが、すぐにどこまでできるわけではないからの」

「それなのに、なぜ、甚左衛門めに、あのような任務を？」

「余の憂慮するのは、いくら河童どもとは申せ、余の差し向けた山師を手玉に取ったということが問題なのじゃ。ま、ちと、彼奴らに懲らしめを与えるほどのことじゃ。甚左衛門には、うってつけである……」

心配

藤四郎は笑顔になった。

「さようでございましたか！ いや、この藤四郎、つくづく安堵いたしました！」

上総ノ介の懐から微かな呼び出し音が聞こえている。

懐から無線行動電話ケータイを取り出す。開くと、耳に当てた。

「余じゃ！ 例の物は、できておるか？」

相手の言葉に大きく頷いた。瞬時に上機嫌になる。

「さようか！ では、見せて貰えるのじゃな？ うむ、うむ……では地下室で……。これより参る。待つておれ！」

さっと立ち上がる。

大広間の階段を降りていき、地下室を目指した。ふと見ると、藤四郎が渋い表情を見せていた。

「なんじゃ、鼠。まだ何か言いたいことがあるのか？」

「今のは、あの男からでございますな？」

「そうじゃ。それが何か？」

「この藤四郎、あやつのが、どうも信用なりませぬ」

かんらからつ、と上総ノ介は笑った。

「そちは、心配性じゃのう……。判った、今より地下へまいる。そちも従いてまいれ」

「よろしいので？」

「うむ」と、上総ノ介は鷹揚にうなずいた。

狂弥斎

破槌城には、広大な地下室があった。

普通、地下室は兵糧や武器を備蓄したり、あるいは敵の捕虜などを監禁するために存在する。それゆえ薄暗く、狭い。

しかし、破槌城の地下室ばかりは破格の規模であった。

天井は高く、広々としている。部屋の大きさは、大広間と比べて少しもひけをとらない。

その地下室には、奇妙な機械が鎮座していた。

材質は木造で、移動させるための車輪と、操作するための棒が突き出している。太い木造の腕が突き出し、それには太い綱が幾重にも巻き付いていた。

投石器であった。

上総ノ介と藤四郎が姿をあらわすと、投石器の陰から一人の男が素早く立ち上がり、出迎えた。

襷のついた襟飾り、長袖、襦袢のような下穿き。足には革靴を履いている。

南蛮人であつた。

長い手足をした、痩せこけた男だつた。現れた上総ノ介に対し、南蛮人はぎろりと視線を送る。

鳶色に近い瞳は、地下室を照らす火明かりに猫の目のように光つた。南蛮人は、きょうやさい狂弥齋と自称していた。それが本名なのかどうなのか判らない。

懸案

「これがそうか、そちの申しておった」

言いかけその名称を度忘れしたらしく、苛々した表情になる。それを見てとり、南蛮人は言い添えた。

「^{フィフ}回砲にてございます」

「妙な名前じゃの？」

「もともとは回族^{フイ}が発明いたしました攻城砲でございました。唐土^{モロコシ}では、これを当地の呼び方に倣い、回々砲と呼びならわします」

「動かせるのか？」

南蛮人は頭を下げた。肯定の仕草であろつ。

「見たい！ 動かしてみよ！」

「一人では無理です。傀儡がなければ」

「なぜじゃ？」

上総ノ介は、見る見る不機嫌になる。

傀儡は現在では出払っている。城の建造の時は、どこにでもいたのだが、今は領内の様々な工事に散らばっている。

「この投石器は強い力で岩や弾丸を打ち出しますが、あの腕を引くためには人間の膂力では動かせません。それに外に出すのにも、傀儡の力でなくては……」

南蛮人は上総ノ介の機嫌を損なわないよう汗を掻いていた。急に狡猾な表情が浮かぶ。

「それに、もう一つ……上様のご提案にあつた懸案でございますが

……」

上総ノ介の目が輝いた。

「できるのか？」

狂弥斎はまた頭を下げる。

「見通しが立ちました。来月にはなんとか……」

「そうか、そうか！」

上総ノ介は打って変わって上機嫌になった。投石器に近づき、ぺたぺたと平手で触る。

妙案

ふっ、と南蛮人を見返り、口を開いた。

「それにしても、そちは妙な南蛮人じゃの。余は京で幾人も南蛮人を見かけたが、きゃつらは余の知識を求める要請に対し、にべもなく断つてきよった。きゃつらの申し状によると、それは規律に反するとか申す。何の規律かと尋ねると、それを教えることも反すると云って済ましておる。まことに怪しからぬ！　じゃが、そちは……」
面白がる表情になる。

「進んで余に近づき、余が天下布武をするに必要な方法を教えて進ぜると申す。あの楽市楽座、各地に代官を置くなど、いろいろ入れ知恵をしてくれたわ。おかげで余の天下布武は、大いに進んだ……さらに、このような武器も造ると申す。いったい、そちの狙いはなんじゃ？」

狂弥斎は、うつすらと笑った。

「上様が天下統一をなされるのを見届けるのが、わたしの目的なのです。それ以外、存念はございません」

木本藤四郎は口をへの字に曲げ、不審そうな目つきで投石器を見上げている。不意に南蛮人に顔を向け、口を開いた。

「わしが耳にしたところによると……そちら南蛮人は、いろいろな武器を持っているそう。同期位相光束発射装置とか申したようじゃが……。それを上様に献上しようとは思わぬのか？」

狂弥斎は大きく首を振った。

「そのような武器が戦場に使われたら、たちまち、わたしの介入が判つてしまいます。この投石器は、あなたがたの技術でも製作できるものなので、わたしの介入はバレません。上様にさまざまな知識を伝えることは、本来は禁じられているですよ。それを重々お忘れなく」

上総ノ介は悪戯っぽい顔つきになった。

「藤四郎、今、妙案を思いついた。そちは、この投石器を持って、明日、甚左衛門と共に河童淵へ向かえ！ 最初の試し射ちを任せる」

藤四郎は、ぎょっと腰を抜かしそんな表情になった。

進軍

投石器の周りを独楽鼠こまねずみのように素早く回りながら、藤四郎は汗を掻いて傀儡師に指示を出している。

「そらっ！ 右が傾いた……違う、違う！ そっちじゃない！ ええい、鈍い奴らめ！」

傀儡たちは巨大な投石器に取り付き、えっちらおっちら、地面を運んでいる。

投石器に付けられた巨大な車輪がごろごろと音を立て、その背後から二輪車うまにうち跨った木戸甚左衛門が、からかうような眼差しで藤四郎の奮闘を眺めていた。

翌日、緒方上総ノ介は、早くも二輪車を領内に飛ばし、傀儡と傀儡師たちを召集させた。そして破槌城の地下から投石器を引き出させ、河童淵へと向かわせたのである。

軍勢は、およそ五十人。徒歩かちの者がほとんどで、みな揃いの軍装で手には槍、背には弓矢を担いでいる。

木戸甚左衛門と木本藤四郎は大将であるので、当然、二輪車であった。ところが、投石器を任されている藤四郎は、のんびり二輪車に跨ることもできない。そこで、こうして汗を掻いて傀儡たちに指示を出しているというわけだ。

藤四郎の二輪車は配下の足軽が押して歩いている。足の短い藤四郎に合わせた、座高の低い、簡便スクーター二輪車であった。

傀儡たちの召集に手間取り、ようやく出立の用意が整ったのは、

昼すぎであつた。

この分では河童淵に着くのは夕刻になるな、と藤四郎は憂鬱であつた。そのような刻限に戦は、したくなかつた。特に、幻術を相手にすると、昼間のほうが有利に思える。

強い日差しに、むっとするほどの草いきれが立ち上る。青草の清々しい香りだけが、救いであつた。

藤四郎の横には、山師の作蔵が付き従っている。河童淵への道案内である。

破槌城が見えなくなる辺りで、ようやく傀儡たちの息も合い始めた。藤四郎が息を弾ませて指示をしなくとも、どうやら順調に進むようになつてきた。

疑念

藤四郎は作蔵に話しかけた。

「そちは、河童を見たことがあるか？」

作蔵は首を振った。

「いいえ、見たことはありません。しかし、あの辺りに河童が住んでいることは、地元の百姓たちには良く知られたことでございます。何年か前に、百姓と河童の間でなにやら揉め事がございましたようで、それ以来ずっと、河童淵の近くは結界となっているそうでございます」

と、作蔵は、なにやら思い出した表情になった。

「そう申せば……あの辺りで山見立てをしていたとき、妙な小僧に出会いました。下帯一つの素っ裸で、髪もざんばらで、口調もろんざいな小僧でしたな。最初、この辺りの百姓の息子かと思いましたが、そのような態度ではなかったように思います。目の隅に目立つ痣がございました……」

二人の会話に、甚左衛門がなぜか興味を持ったようだった。

「目に痣とな？ 幾つくらいに見えた、その小僧？」

作蔵は背後の甚左衛門を振り返った。

「さよう……十五歳にはなっておりませぬかな……。そうそう、思い出しました。あの小僧、我らが声を掛けると逃げ出しましたが、その方向は河童淵を目指しておったようでございます」

藤四郎はちら、と甚左衛門を見やった。

甚左衛門は上の空で、藤四郎の視線には気付いていない。頬の傷跡がひくひくと動いている。藤四郎は甚左衛門のその表情が、なにか考え事をしているときの癖であることを知っていた。

また何か、善からぬ企みをしているのであろう……。

藤四郎は改めて「甚左衛門から目を離すまいぞ」と密かに思った。

木霊

藤四郎の危惧した通り、河童淵に到着したのは、夕刻近くだった。空気はひんやりと冷たく湿り、聳え立つように生えている海岸紅杉^アが暗い影を投げかけている。

遠くから、どうとうと滝の音が聞こえている。

「この辺りでございます……」

微かに震え声で作蔵が甚左衛門に話しかけた。甚左衛門は無言で頷いた。

河童淵攻略の使命は甚左衛門が請けているので、手には軍配を持っている。藤四郎は投石器と、軍鑑の役目である。

二輪車^{うま}からひらりと地面に足を降ろし、甚左衛門は軽い足取りで滝壺を目指した。藤四郎も慌てて、その後を追う。

岩がちの獣道を辿ると、不意に眼前が開け、滝壺が視界に入ってきた。

「これは……！」と、思わず藤四郎は声を上げていた。

滝壺に巨大な河童の像が刻まれている。高さは、約十丈。見上げるほど巨大な石像は、滝の水飛沫を浴び、静かにこの場所を守っているようだ。

甚左衛門は腰に手を当て、いきなり声を張り上げた。

「この辺りの河童に物申す！ 先日、我らの配下の山師三名、うぬらによって幻術を掛けられしと聞く。そのような怪しの術、この木戸甚左衛門には通用せぬと知れ！ 直ちに降伏して余の下知に従え

ばよし、もし逆らうなら、後悔することになるうー!」

なるう……

なるう……

甚左衛門の語尾が、滝壺に木霊した。

霧

藤四郎は伸び上がって甚左衛門に話しかけた。

「さて、河童どもが聞いておるのかのう……」

「聞いている。近づいた辺りから、気配がびんびんと感じられたわい！」

おぬしには感じ取れなんだか？ という意味が言外に籠められている。

藤四郎は面白くない。武芸は、藤四郎の苦手であつた。

それに、甚左衛門のざっかけない口調も。かつては自分に対し、謙へりくだった言葉遣いであつたのが、同格になると、途端にこれだ！

と、滝壺から声が響いた。

ここは水虎さまの聖域じゃ！

性懲りも無しに、またぞろ、やって来おつた

水虎さまの恐ろしさを知れ

藤四郎が背後を振り返ると、作蔵ががたと震えている。

「霧が……」

作蔵が呟いた。

藤四郎が辺りを見回すと、その言葉どおり、濃密な霧が立ち込めている。

さつと甚左衛門は、軍配を上げた。

「構えよ！ 油断するでない！」

しかし、兵たちは甚左衛門の命令を聞いていない。みな、青ざめた顔で、辺りをきよろきよろと見回すだけだ。

甚左衛門は、苛立った声を上げた。

「ええい、みな何を臆しておるか！ ただの霧ではないか！」

一人の兵が震える指先を甚左衛門の背後に突き立てた。

「あ、あれ……！」

「何？」と、甚左衛門と藤四郎は振り返る。

まじまじと二人の目が見開かれた。

矢弦

霧の中から、滝壺の河童像が、ゆったりとした歩みで現れる。霧を掻き分け、巨大な河童は、ずしり……と重々しい足音を立てた。

ひえええ……と、兵たちは悲鳴を上げていた。

わっ、とばかりに浮き足出す。今にも背を向け、逃げ出しそうだが、口許を引き結び、甚左衛門は素早く兵たちの前に回り、すらりと腰の刀を抜き放った。

「もし、逃げる者があれば、この場で切り捨てる！」

口調は真剣だった。

兵たちの、足がひたと止まった。

しかし目は巨大な河童に向けられている。

ずしり……また一步、河童は近づく。

甚左衛門は大声を上げた。

「みな、弓を持て！」

兵たちは顔を見合わせた。おずおずと弓を手にすると、矢を番え
る。

甚左衛門は首を振った。

「そうではない！ 矢弦^{やじろ}を鳴らせ！」

堪らず、藤四郎は声を掛けた。

「甚左衛門、何を言っておる？」

甚左衛門は怒りに満ちた顔を藤四郎に向けた。

「幻術破りには、これが一番なのじゃ！」

兵の一人から弓を奪い取ると、自ら弦を引き絞り、びいんと弾いた。

「さあ、同じようにせんか！」

兵たちは、さっぱり訳が分からないまま、見様見真似に甚左衛門の仕草を真似る。

びいん！

びいん！

びいん！

霧の中に、兵たちの矢弦を鳴らす音が響いた。

追儼

藤四郎は迫り来る河童像を見つめていた。

呟く。

「河童の石像が消えるわ……！」
信じられぬ、と首を振る。

巨大な河童の石像が、じわりと空中に溶け込んでいった。同時に、あれほど立ち込めていた霧も、急速に薄れていく。

藤四郎は甚左衛門に振り返った。

「甚左衛門、どういう訳じゃ？ いったい、何が起きた？」
「追儼^{ついな}の行事に、京の公卿どもが啼弦^{めいげん}の法というのを、やっていてな。それで、思いついたのよ。破魔矢と申すではないか。昔から、弓には魔を払うという言い伝えがあったので、もしやと考えたのだ」

甚左衛門は、にたりと、勝ち誇った笑いを浮かべた。

理由は矢弦の震動が、河童たちの【水話】の音波に干渉したためである。矢弦の振動数は、河童の音波の倍数の周波数に相当し、両方が打ち消し合う形となったのだ。

がさがさがさ……

滝壺近くの山笹が掻き分けられる音がして、二人は、はっとその方向を見た。

すると……。

見よ！ あちこちから河童たちが、うようよと夕闇の中から湧き出してくる！

河童たちは怒りの表情を顕わにしていた。

そのうちの一人が素早く地面から小石を拾うと、ひゅっと投げつけてきた。

びしっ！

礫いかりをまともに受けた兵が、呻き声を上げ、倒れた。怖ろしいほどの威力がこもった、河童の礫であった。

けえ っ！

河童の甲高い叫び声が、長く尾を引き、それをきっかけに「わあっ！」とばかりに襲い掛かってくる。ぴよんぴよんと跳ねるような動きで、人間離れた跳躍だった。

「者ども、何をしておるっ！ 矢を番えよ、槍を構えるのだ！」
甚左衛門が軍配を手に喚いた。

兵たちは叱咤の声に、ようやく我に帰ったようであった。

日ごろの訓練通りに体が動き、気がつくつとすでに、矢弦に矢を番えていた。

「討て っ！」

さつと甚左衛門が軍配を振ると、兵たちは一斉に矢を放った。

投石器

ざあつ、と怖ろしい音を立て、矢は向かってくる河童たちに放たれていく。

ぎゃつ！

ぐえつ！

短い悲鳴を上げ、河童たちは次々に矢に貫かれ、地面に倒れた。それを見た河童たちに、恐慌が起きた。

「槍、構え　　っ！　掛かれ　　っ！」

甚左衛門の命令に、槍兵たちが穂先を並べ、突っ込んでいく。きゃあ　　っという絹を引き裂くような細い鳴き声を上げ、河童たちは退却した。

「藤四郎、何をしておる！　投石器はどうした？」

甚左衛門に呼びかけられ、藤四郎は「あつ！」と我に帰った。

「傀儡ども！　投石器を！」

喚いた藤四郎に、ぼけつと突っ立っていた傀儡たちは、ようやく動き出す。ぎりぎりぎり綱を引き絞り、投石器の腕を倒した。腕の先の受け皿に、傀儡の一人が巨大な岩を持ち上げ、載せる。

「射てーっ！」

がくん、と掛け金が引かれ、ぐると投石器の腕が回転した。

空中を飛ぶ大岩は、いやにゆっくりと放物線を描いていた。藤四郎は唾を呑みこんだ。

滝壺に、岩は吸い込まれるように消える。

そして

凄まじい水飛沫が上がった。

その場にいた河童たちは、水飛沫に掬われ、薙ぎ倒される。しかし蛙の面になんとかで、まったく応えていない。

大波に攫われる感じが面白いのか、けっ、けっ、けっというような奇妙な笑い声が聞こえていた。

「次じゃっ！ 次を射てっ！」

苛々と足踏みをして、藤四郎は叫ぶ。傀儡たちが同じ作業を繰り返す。

ぶうん、と音を立て、大岩が飛んだ。

震動

今度は岩は滝壺の、水虎像の足許に命中した。衝突した瞬間、岩は四方に砕け散った。衝撃で水虎像が微かに揺れたように見える。

藤四郎は齒噛みした。

「くそつ、役に立たん……」

「いや……」

いつの間にか、甚左衛門が横に来ていた。

「そうでもないようだ」

「なに？」

あれを、と甚左衛門が水虎の像を指さしていた。

水虎像の足許から白い煙が湧き上がっている。

どとどとど……

微かな震動が足下から伝わってくる。藤四郎の額に汗が噴き出した。

「こ、これは、地震か……？」

甚左衛門は地面に跪く。手を地面に押し当てた。

「藤四郎、触ってみよ」

言われて、藤四郎も地面に手を押し当てた。

はっ、と顔を挙げ、甚左衛門の顔を見つめる。

「暖かい……」

水虎像の足下から、もくもくと白い蒸気が噴き上がった。

ずばあああん……！

怖ろしい爆発音とともに、熱風が藤四郎と甚佐エ門の顔に吹き付けてくる。

わあつ、と二人は思わず腹這いになっていた。目の前の草を掴み、藤四郎は我知らず念仏を唱えていた。

大笑い

報告を受けた上総ノ介は、腹を抱えて呵々と大笑いしていた。

「なんと、熱泉が噴き出したと申すか！　つまりは、あれよ、河童淵は温泉だった訳じゃな？」

藤四郎と甚左衛門は上総ノ介の前に神妙に並んで平伏していた。

「作蔵よ。そちが言っていた？　何かありそうだ？　という言葉は当たっておつたな。金鉱ではなかったが、温泉は出たようじゃ」

上総ノ介は大広間の片隅に声を掛けた。

大広間の片隅に、山師の作蔵が苦虫を噛み潰したような表情で控えている。作蔵は、うなずいて答えた。

「まことに恥じ入り至極にございます。この作蔵、一生の不覚でございました」

河童淵に注ぐ滝壺に藤四郎が投石器で岩を投げ入れ、そこから湧き出たのは温泉だった。温泉の温度は、びっくりするほど高く、ほとんど沸騰しているほどだった。

藤四郎と甚左衛門はその出来事に驚いたが、河童はそれ以上だった。

熱い湯が噴き出たその場にいた河童は、初めて体験する湯の温度に逃げ出し、同時に立ち込める硫黄などの匂いに恐慌を来^{きた}していた。以降は、逃げ惑う河童たちを、甚左衛門指揮の兵たちが、草を刈るような気軽さで掃討していった。

上総ノ介は甚左衛門に向き直った。

「甚左衛門よ、河童どもは、これに懲りて、もう作蔵たちにちよっかいは掛けまい。しかし、あそこに金は出ないことは、はっきりし

た。まあ、こんなこともあるわい」

次いで作蔵に声を掛ける。

「作蔵よ、がっかりするでない。まだまだ、わが領内には人の踏み入っていない山がある。それらを丹念に探せば、金とは言わぬが、ほかの銀とか、銅しろがねくらいは出るかもしれんな。引き続き、山見立てを申し付ける」

へへっ、と作蔵は平伏した。

上総ノ介は脇息に凭れ、顎を撫でる。その表情が悪戯っぽいものになる。

「それにしても、温泉とはな。河童どもは、これから先どうするつもりじゃろ？」

にやにやと笑いが、その目に浮かんでいる。温泉に途方に暮れる河童の絵が浮かんで、上総ノ介のおかしみの感覚を刺激したのだから。

揉め事

「おい？土掘り？！」

押し殺した怒りの声に、時太郎は振り向いた。仲間の河童の一人が、上目遣いに時太郎を睨んでいる。

背後には数人の河童たちが、厭な目付きで、じろじろと「成り行きや如何に？」と見守っている。

むっとなつて、時太郎は答える。

「おれは、時太郎！ 名前で呼べよ。それに、おれは？土掘り？じゃないぞ」

けっ、と河童たちは嘲笑った。

「何を生意気に！ おめえは？土掘り？じゃねえか？ さつさと仲間の？土掘り？の所へ行つちまえよ」

どん、と腕を伸ばして時太郎の肩を突く。突かれて、時太郎は尻餅をついた。

河童の力は十人力、と言われる。ひよろひよろに痩せていて、どこにそんな筋力があるのかと思われるが、河童は意外な臂力を秘めていた。

くそっ、と時太郎は立ち上がり、拳を固めた。

時太郎の勢いに、河童たちの目が残忍な期待に煌めいた。

その時

「やめい！ 何を揉めておるのか？」

唄^かれた老河童の声が、その場にいた全員の足を止めさせた。岩の上に長老が杖を突き、きつい目で時太郎たちを見下ろしている。

「喧嘩をしておる時ではないはずじゃ。そうじゃな、時太郎」

時太郎は俯いた。

背後で河童たちが、こそこそと場を離れる気配がしている。長老を見上げると、優しい目付きで微かに微笑んでいる。

ぴょん、ぴょんと岩に足をつけ、長老は意外と身軽に時太郎の側までやってくる。ちよつと首を傾け、歩き出した。従いてこい、と
いっつもりらしい。

匂い

「お前のせいではないよ」

並んで歩くと、小柄な長老は時太郎を見上げながら声を掛けた。
時太郎は無言でうなずく。

「わしら河童は人間たちとは、なるべく関わらぬよう暮らしてきた。それが思いもかけず、あんな戦いになってしまった。あまつさえ、惨めな敗けで、ほうほうの体で逃げざるを得なくなつて、お前に怒りをぶつけておるのじゃ。まあ、我慢することじゃ」

長老は顔を顰めた。

「しかし、この匂い！　なんとか、ならんものかのう……」

辺り一帯には硫黄の濃密な匂いが立ち込めている。

上流からは温泉が滝の水に混じり、河童淵の沼はどろりとした乳色をしている。水温が上がって、表面からは湯煙が出ていた。

所々、熱にやられたのか、数尾の魚が白い目を剥き出して腹を見せ、ぷかぷかと水面に浮かんでいる。

河童の一人が恐る恐る魚を掬い上げ、口に持っていた。がぶりと噛み付き、すぐ「ぺっ！」と吐き出した。熱を通した魚など、食べた経験がないのだ。

水量が増え、河童淵の畑は水に浸って全滅していた。

河童の女たちは憂鬱そうな表情で、残った作物を収穫して、竹の

箆^{マト}に入れている。お花も女たちに混じり、残された胡瓜や香瓜^{メロン}、赤^ト茄^{マト}子をもぎ取っていた。

二人の三郎太

「これではもう、ここには住めぬな」

溜息をつき、長老は呟いた。

「長老さま、人間たちに仕返しは、しないんですか？」

長老は眉を下げ、首を振った。

「仕返ししようにも、男たちは大多数が、やられてしもった……」

河童淵には、あちこち怪我をした河童たちが情けない顔つきでへたりこんでいる。戦いは一方的なものだったが、奇跡的に死人は出ていない。

しかし腕や足を回復不能なまでにやられ、みな意気消沈していた。とても復讐など考える余地は無さそうだ。

ふと時太郎は、大きな岩にぽつんと座っている河童を見上げた。父親の三郎太だ。

何を考えているのか、三郎太はぼんやりとした無表情で、凍りついたように身動きもしていない。

時太郎には時々、父親の三郎太の言動が判らなくなる。まるで二人の三郎太が父親の中にいて、代わる代わる入れ替わるような印象がある。

普段は優しく、荒げた声一つとして上げたことのない父親であったが、もう一人の三郎太が居る時は、時太郎には声を掛けることを躊躇う？なにか？があるようだった。

今も、そうだ。

三郎太は真っ直ぐ、滝壺の方向を見つめていた。

双つの月

夜空には、双つの月が出ていた。

紅月と藍月。

見かけは同じ大きさだが、藍月のほうが小さく、その動きは早い。一年のうち双つの月が夜空に出ているのは三月あまり。その三カ月間に、わずかだが、双つの月が重なり合う？双月蝕？がある。今が、その時である。

じりじりと藍月は紅月に追いつき、お互いの縁を接しつつあった。

胸騒ぎを感じ、時太郎は寢床から起き上がった。隣の寢床を見ると、空っぽである。そこには三郎太が寝ていたはずだ……。

どうしたんだろう……。

時太郎は二人が使っている洞窟から外へ出た。もあつ、と湿った熱気が、夜の闇を塞いでいる。河童淵に注ぐ熱水が、空気を耐え難いほどの暑さにしていた。

崖のあちこちに空いた穴には、今は仲間の河童は、ほとんど住んでいない。この熱気に耐えられぬと、海岸紅杉の森へ逃げ込んでい
るのだ。セコイヤ

双つの月が投げ掛ける光を浴びて、辺り一帯は薄紫色に染まっている。

沼からは靄^{もや}が立ち上がっていた。

その靄霞の中に一人の河童が立っている。

時太郎は目を細めた。やはり、三郎太である。

あれから三郎太は、だんまりを続けていた。

まるで心ここにあらず、といった様子で、ぼんやりと虚ろな目付きになっていた。時太郎は、そんな虚脱状態の父親に声を掛けられず、やきもきしているだけだった。

やがて、三郎太は歩き出した。行き先は、水虎さまの像がある滝壺のようであった。

水虎

時太郎はゆっくりと父親の後を尾けていった。
ふらふらと、頼りない足取りで父親の三郎太は滝壺へ歩いていく。
その先に聳えているのは、水虎さまの像である。

ざあざあと、水飛沫が像を洗っている。

時太郎は、どきりと立ち止まった。

なんと！

水虎さまの目が光っている。

ぼんやりと、祖母^{エスラルド}緑色に光っていた。

三郎太は立ち止まり、水虎さまを見上げた。その視線は、水虎さまの目に向かっていく。

しばらく三郎太は、そのまま微動だにしなかった。
が、不意に三郎太は時太郎を振り向いた。

「時太郎、そこにいるんだろ？ こつちへおいで」

穏やかな声だった。時太郎は即座に、それまで隠れていた岩陰から飛び出し、三郎太の前へ進んだ。

「父さん？」

三郎太は微かにうなずいた。

「時太郎、たった今、水虎さまの？ お告げ？ があった……」

父親の言葉に、時太郎は仰天した。

「？お告げ？？」

ああ、と三郎太はうなずいた。

「お前にも聞こえる筈だ」

意外な父親の言葉に、時太郎は「えっ？」と聞き返していた。

「おれに？」

「そうさ」と三郎太は水虎さまの像を見上げた。釣られて、時太郎も見上げる。

巨大な、水虎さまの像がのしかかるように聳えている。中天には双つの月がお互いの縁を接し、見る見る藍月が紅月を蝕すかのよう
に覆い始めている。

ついに、藍月が紅月を完全に隠した。一瞬、まわりが深い青
瑠璃紺青色に染まる。

その瞬間

時太郎……

深い、穴の底から響いてくるような？声？が、時太郎の全身を満たしていた。

水飛沫

時が止まっていた。

藍月は紅月を蝕し隠したまま、その場に留まっている。藍月の深沈とした瑠璃紺青色が、すべての物を凍りつかせている。

水飛沫すら、その動きを止め、宙に水玉がぴたりと留まり、月の光を受けきらきらと輝いていた。

時太郎、母親を捜すのだ……今こそ、お前は母親の時姫に会う時機が来た……

母親？ 時姫？

いったい、何のことだ？

時太郎の思考は、空回りを続けていた。

三郎太は、今まで唯の一度も、時太郎の母親のことは口に出したことがなかった。第一、母親の名前すら知らなかった。母親の名前は、時姫というのか……？

水虎さまの思考は続いた。

時太郎、お前には【聞こえ】ちから能力がある……その能力で、母親を捜せ……

ざあざあと水飛沫の音。

突然、世界は生命を取り戻した。

ざわざわと森の木々が梢を鳴らし、水虎さまの足下から湧き出す熱泉が、時太郎の頬を火照らせる。

夜空を見上げると、双つの月は離れ離れになるところだ。藍と紅の双つの月は夜空を横切り、薄紫の竜胆色りんどうの闇が、辺り一帯を支配していた。

時太郎は三郎太を見た。三郎太は、大きくうなずいて見せた。

「朝になったら、長老さまに会おう」

時太郎は身じろぎもできず、ただ水虎さまの像を見上げていた。

反感

髭を扱きながら、長老は眉を下げ、考え込んだ。

「水虎さまが、のう……」

つぶやく。

巨大な海岸紅杉メタセコイアの森に、急ごしらえの長老の小屋が掛けられていた。その内部に枯れ草を積み上げ、長老が胡坐をかいている。

背後には数人の河童が、疑いの目で三郎太と時太郎の二人の背中を見つめていた。

「長老さま。三郎太はともかく、時太郎が水虎さまの？お告げ？を耳にしたとは、とうてい信じられませんか」

一人が、いかにも不快そうに声を上げた。声には、ありありと不審の心情が滲んでいる。もう一人が、それに同意した。

「そうじゃ！　こんな半人前……いや？土掘り？の童っぱに、われらの守り神の水虎さまが直々に声をお掛けになるとは、夢にも考えられぬことじゃ！　おそらく、その？土掘り？めの作り事じゃろうて！」

時太郎とは呼ばずわざと？土掘り？と呼びかけている。

あれから河童たちの、時太郎に対する態度は、ぎすぎすしたものとなっていた。皆、ふとしたことでも時太郎に辛く当たるようになっていて。

長老の前に座る時太郎は、強いて河童たちの敵意に満ちた視線を無視していた。

おれは河童だ！　？土掘り？なんて呼ぶな！

大声で叫びたい。だが、必死に我慢している。

長老は杖にすがって立ち上がった。

「ともかく、水虎さまの？声？を確かめてみなくてはなるまいて…

…」

面影

その言葉に集まっている河童たちは、一様に驚きの表情を見せた。

「長老さま、そやつの言葉を、お信じになられるので?。」

「信じる、信じないはともかく、確かめてみよう、ということじゃ。そう先回りするでない」

よちよちと長老は森の中を歩き出す。その後をぞろぞろと河童たちが続き、殿軍に三郎太と時太郎が続いた。

ふと気配を感じて横を見ると、お花が並んで歩いている。

お花は時太郎の顔を悪戯つぱく覗きこんだ。

「時太郎、あんた、水虎さまの声を聞いたんだって?」

時太郎は無言でうなずく。

へええ……と、お花は顔を近づけた。

「あんたがねえ……! それで水虎さまは、なんて仰ったの?」

「母さんを探せて……」

「母さんっ! あんた、母さんがいたの?」

時太郎はむっとなってお花を睨んだ。

「当たり前だろう。おれを何だと思っているんだ」

お花は、しゅんとなった。

「ごめん……でも、考えもしなかったな。あんたに母さんがいるな

んて……」

お花の言葉に、時太郎は「実は、自分もそうなのだ」と言いたかった。

今まで一度も母親のことなど、考えもしなかった。

時太郎の視線に、お花は「なあに？」と首をかしげる。

慌てて、時太郎は視線を外す。

まだ見たことのない母親は、お花に似ているのだろうか？

水虎像

濛々とした湯気に水虎の像は聳えている。

昼間の光に見る水虎の像は、ただの岩の塊にしか見えない。

雪崩れ落ちる瀑布に、像の足下から湧き上がる湯気が加わり、あたりにはむっと咽せるほどの熱気が籠もっていた。

たちまち河童たちの全身は、びしょ濡れになってしまふ。

しかし、水に濡れることは河童は平気である。閉口するのは、熱気と硫黄の匂いのほうだ。居心地が悪そうに、河童たちはもじもじとしていた。

長老は水虎像を見上げた。それから、ゆっくり目を閉じる。

河童たちは息を呑み、しんと静まりかえっている。

ゆっくりと長老は両腕を上げた。

「お？声？をお聞かせ下され……水虎さま……」

そのまま、じっと立ち尽くす。

どうどうという水飛沫の音だけが響いている。

周りで見えている河童たちの目は、疑い深そうに時太郎に集中していた。

（こんな奴に、水虎さまが話し掛けられたはずがない……）

と、河童たちは、びくりと飛び上がった。

時太郎よ……旅立つのだ……

深い、水の底から湧き上がる泡あぶくのような、ぼこりとした？声？が
頭の中に響く。

お告げ

河童たちは一斉に水虎像を見上げた。

「み……見ろ……水虎さまが……！」

そこには、もはや岩の塊はなかった。

ざあざあと滝の飛沫を浴びる、巨大な河童が立っている。灰色がかった緑色　錆青磁色さびせいじの皮膚、ぺたりと頭の皿を取り巻く髪の毛、ゆっくりと巨大な河童は、その場にいる河童たちを眺めていた。

河童たちは次々に跪き、手を合わせ拝んでいる。

長老は目を見開いた。

「おお……！　水虎さまがお姿をお現し下さった！　なんと云うことじゃ……」

苦楽魔くらくまへ行くが良い……天狗に会うのだ。そして、仲間を探せ……

そこで、ふつつり気配は消えた。水虎像は元の岩の塊に戻った。あまりの驚きに、河童たちは全員、ぼけつと突っ立っているだけだった。口がぽかんと、阿呆病デメンティアに罹患りかんしたかのように開いている者もいる。

さつと長老は、時太郎に向き直った。長老の目は真剣である。

「聞いたであろう。時太郎よ、お前は苦樂魔^{くらま}へ行かねばならぬ！」

兆し

「苦樂魔……？」

時太郎は聞き返した。初めて聞く地名である。長老は、確固としてうなずいた。

「そうじゃ、苦樂魔には天狗の一族が住み着いておる。天狗と我ら河童は、古い盟友なのじゃ！ 水虎さまの仰せに従い、お前は、そこへ行かねばならぬぞ」

髭をなでる。考え深そうな表情が浮かんでいる。

「それにしても今度のことといい、何事か我ら河童の……いや、もしかしたら、この世の総てが変わり行く兆しなのかもしれんな。そしてその中心にいるのが、お前なのかもしれぬ」
「おれが？」と時太郎は自分を指さした。

とても信じられないことだった。

時太郎は父親の三郎太を見た。

三郎太は、なにか自分だけの考え事に浸っているようで、全く時太郎を見てはいない。

また父親が遠ざかったみたいだった。

胡瓜

ぞろぞろと河童たちが海岸紅杉メタセコイアの森に戻っていくと、一人の河童が離れてもとの住処の河童淵へ、ちょこちょことした歩きで向かっている。

あの、長老の洞窟の前で護衛をしていた、太った河童である。

河童は飢えていた。胡瓜に、である。

河童の大好物の胡瓜は、畑で栽培されていたが、湯を被り、呆気なく全滅していた。

それ以来、河童たちは配給制で凌いできたのだが、それも今では滞っている。

(一つくらいは、残っているんじゃないか?)

胡瓜を歯で齧ったときの、あの感触！ とてもではないが、忘れられるものではない……。

湯気が湧き出ている河童淵に顔を出し、あたりをきよるきよると見回す。

畑を見ると……やっぱり全滅だ。河童は、がっかりとした。

が……、待てよ！

沼の中心に聳える岩の天辺に、たった一つだが、胡瓜の苗が植わっている。どうやら胡瓜も実っているようじゃないか！

ごくろり……喉が鳴る。

ああ、食べたい！

が、岩は沼の中心にある。そこへ辿り着くには、湯気の立っている沼を渡らなければならない。

意を決し、おそろおそろ片足を浸す。

熱っ！ 顔をしかめ、足先を戻す。

やっぱり、駄目か……。

頂垂れ、肩を落として森へ戻りかける。

が、やっぱり視線は岩の胡瓜に引き付けられていた。

む！ と息を吸い込み、ちゃぷりと足を湯につける。全身が湯の温度に震え上がる。ぐっと力を込め、湯に全身を浸した。

足先から膝へ、次いで腹、胸へと、潜っていく。その顔は真っ赤になっていた。

ふと、河童は目を見開いた。

驚きの表情が浮かぶ。

「こいつは……」

呟き、口がぽかりと開いた。

じんわりとした笑みが浮かんでいた。

着物

「うん、これなら何とか見られる格好になった！」

満足そうな三郎太の声に、時太郎は「へっ！」と顔をしかめた。
「父さん、やつぱり、こうしなきゃ駄目かい？」

三郎太は鹿爪^{しかづめ}らしく、うなずいた。

「ああ、天狗一族は、対面を重んずる一族だ。いつもの、下帯二丁の格好で会いに行ったら、四の五の言わずに追い出されるぞ！」
時太郎は肩を落とした。

着物を身に着けている。というよりは父親の三郎太に無理やり着せられたのだ。一年中、裸同然でいて、いきなり着せられた着物は、なんだかごわごわして、むず痒い。それに、腰を締め付ける帯が苦しい。

朝の光が斜めに洞窟に差し込んでいる。二人は入口近くに向かい合って座っていた。

旅立ちが決まって、三郎太は時太郎に話があると行って、ここに連れてきたのだ。

三郎太の半身は差し込んだ朝の光に照らされている。にやりと笑って三郎太は口を開いた。

「それに、その頭もなんとかしなくてはならないな！」

「おれの頭？」と、時太郎は自分の頭を押さえた。

「そうだ。そんなボサボサじゃ、天狗は会ってくれんぞ。よし、お

れがお前の頭をなんとかしよう。ちょっと待っておね……」

丁髷

立ち上がると、奥へ歩いていく。膝をつき、物入れから櫛と鋏を手に戻ってくる。

「これはな、お前の母さんが使っていた道具だ。おれが焼け跡から探して持ってきた」

「焼け跡？」

「あとで話す。動くなよ！」

しゃきしゃきと鋏を鳴らし、櫛を使って三郎太は手早く時太郎の髪の毛を梳すいていく。後頭部で髪の毛を引っ張ると、丁髷ちよんまげの形に結い上げた。

「なんだか、顔が突っ張るよ……」

時太郎が不服を言うと、三郎太は首を振った。

「じきに慣れるさ。さあ、出かけるぞ」

「どこへ……？」

「お前の生まれた所だ」

「えっ？」

三郎太は洞窟を出て、足早に外へと歩いていく。

後を追う時太郎は、ときどきしていた。

いよいよ総てが明かされる、そんな期待で胸が苦しい。

洞窟を出ると、一人の河童とばったり出会った。河童にしては珍しく、でっぷりと太った体軀をしている。あの、長老の洞窟を守っていた河童である。

太った河童は、三郎太と時太郎の姿を見て、ぎよっと立ち止まっ

た。

くると背を向けると、小走りに駆けていく。
なぜか、異常に慌てていた。

時太郎が水虎さまの？お告げ？を受けたあと、河童たちは時太郎の顔を見ると、どうにも具合の悪い表情になる。

それまで、さんざん？土掘り？だの？はぐれ者？だのと馬鹿にしていた時太郎に、事もあるうか水虎さまが直々に話しかけ？お告げを？与えたのだ。

どうにも具合の悪い感じになるのも、無理からぬことである。

旅立ち

そこには草が一面に生い茂っていた。

草の隙間から、焼け焦げた柱や、崩れた塀が覗いている。

やや開けた場所に土が盛り上がっている所があり、その上に一抱えもありそうな岩が置かれている。三郎太は時太郎を連れ、土盛りの前に並んだ。

「ここに、源二という男が眠っている……」

三郎太の表情は、厳粛なものだった。

「その源二という男が、お前とお前の母さんを、最後まで守ってくれたのだ。おれは、あいつのために、ここに墓を掘ってやった……」

一息ふーっと入れて、いつにないほどの真顔を作り、三郎太は時太郎に向き直った。

「お前は、ここで生まれた……。お前の母親の名前は時姫。信太従三位の娘、時子だ。いいか、覚えておけよ！」

時太郎は口の中で、三郎太の口にした母親の名前を繰り返した。

「母さんは、どんな人だったの？ 綺麗だった？」

三郎太は遠くを見るような目になった。

「不思議な娘だったな……。もちろん、綺麗な娘だったが、それよりは、不思議な娘という感じが強い。【聞こえ】の能力ちからというものを持っていて、時々おれには聞こえない何かを聞いているようだった」

「その【聞こえ】の能力だけど、何を聞くんだろう？」

三郎太は首を振った。

「判らない……。あれは、おれに説明してくれたが、結局のところ何が言いたかったのか、今でも謎だよ」

三郎太の手は、ふらふらとさ迷った。

苦笑いをして時太郎を見る。

「しかしまあ、お前にも母さんと同じ【聞こえ】の能力があるのだから、いずれ判るときが訪れるんじゃないのか？」

山並みに顔を向けた。

二人が立っているところは、やや高台になっていて、木々の隙間から遠く霞がかつて、山並みが連なっている。

三郎太は指さした。

「苦樂魔^{くらくま}は、あの山並みの中にある。水虎さまの像が見ている方向が、苦樂魔だ。だから、河童淵から流れている小川に沿って歩いていけば、いずれ天狗たちの結界に入るだろう。河童の足なら……いや、お前の足なら、三日も歩けば辿り着ける」

「父さんは天狗に会ったこと、ある？」

「昔のことだが……まだ、お前が生まれていないころ、母さんとも会う前、おれは河童淵以外のところに河童がいないものかと、あちこち旅していた。その時、天狗の住処にも立ち寄ったよ。馬鹿な真似をしたもんだ。このなりで会おうとしたんだからな」

三郎太は苦笑した。三郎太は普通の河童と同じ、下帯一丁の姿である。

「あとで人間から着物を借りて、ようやく会ってもらえた。だが、あまり収穫は無かったな。しかし、天狗たちというのは変わってい

るな」

時太郎は「どういうこと？」というように、眉を上げて見せた。三郎太は肩をすくめた。その所作は、人間たちがよくやる仕草で、河童は絶対やらない。「あちこち旅を」してきたせいで、人間の癖が移っているのか？

「まあ、行ってみれば判る」

三郎太は、悪戯っぽく笑った。

さてと、とでも言うように、三郎太は腰に手を当てた。

「それじゃ、時太郎。行つて来い！ 旅の無事を祈っているぞ。首尾よく天狗の協力が得られたら、母さんを探しに京の都へ行くんだ。そうだ、お前に渡しておくものがあつた」

三郎太は時太郎に櫛と、砂金が入った袋を渡した。

「この櫛は、母さんがいつも持っていたものだ。京で母さんの行方を訪ねるとき、見せるがいい。ただし！ 滅多な相手に見せるんじゃないぞ。信用できる、とお前が判断した相手だけに見せるんだ。それと、この袋の砂金は、旅の費用に当てる。全部を見せるなよ。人間は途轍もなく欲深い。ほんのすこし、一粒二粒を渡して、反応を見るんだ。とにかく、油断するな！」

時太郎は三郎太からそれらを受け取り「ありがとう」と礼を言った。懐にしまいこみ、小川に沿って歩き出す。

最後に振り返り、叫んだ。

「行ってくるよ！ 父さん！」

三郎太は深くうなずいて、手を振った。手を振り返し、時太郎は歩き出した。

それいり、もう振り返らない。

大股で歩きながら、時太郎は大きく息を吸い込んだ。
なんだか気分が晴々としてくる。時太郎は前途に希望を感じて
いた。

苦楽魔へ！

いい湯だな！

時太郎が見えなくなると、三郎太は溜息をついて、河童淵へ戻り始めた。

胸の中には心配と、後悔が嵐のように吹き荒れている。

たった一人で行かせるのは、身を切られるように辛かった。本当は、息子に同道したかったのである。

しかし、三郎太は絶対に河童淵を離れるわけにはいかなかった。なぜそうなのか、その理由は三郎太自身にも判らない。ただ、離れるべきではないとだけ、本能的に強く思っていた。

三郎太は何かを待っているのだ。

その何かが、何であるかも現時点では判らない。ただ、その時が来たら判るのではないかと、うつすら思っているだけである。

形の無い疑問に三郎太の足は重い。

河童淵に近づくと、硫黄と熱気が感じられた。沼からの湯気で、あたりは靄が掛かっている。

と、沼からは、ばしゃばしゃと湯を撥ねかえす音と、談笑する声が聞こえてきた。

なんだろう？ 三郎太は目を瞠った。

見ると湯気の立っている沼に、数人の河童がぶかぶかと浮いているのが見える。

みな弛緩した表情で、うつとりと薄目を瞑っている者すらいる。

河童の中心にいるのは、長老だった！

ぎよつと驚いた三郎太に気付き、長老は湯の中から首だけだして声を掛けてきた。

「よう！ 三郎太！ お前も湯に入りに来たのかの？」

「長老さま、これはまた、どういうことで……？」

三郎太の問いかけに、長老は湯の中から、にっこりと笑った。

「いや、水虎さまから熱い湯が噴き出て、河童淵の沼に注ぎ込んだとき、これは大変な事態になったと思ったが、なんの！ 湯に浸かるということは、実に気分が良いのう……ほれ、人間たちが湯治とやらをするそうでないか？ わざわざ熱い湯に浸かるなど、沙汰の限りと思っていたが、実際やってみると、これは極楽じゃよ！」

長老は目を閉じ、ゆったりと全身から力を抜いた。

となりの太った河童が同意した。

「まったく、その通り！ こうして湯に浸かっていると、なんだか体の芯がじんじんとしてきて、とろとろに溶けてしまいそうになりますわい……ああ、極楽、極楽！」

湯の中から首だけ出している太った河童は、河馬のような呑気な表情でいる。

「こいつは、水虎さまのお恵みじゃな！」

呆然と立ち尽くしていた三郎太だったが、ふと「ぷっ」と吹きだした。

「くっくくく……！」と、笑いの発作が襲い、ついには大口を開けて笑い出した。途切れ途切れに声を上げる。

「まったく河童というのは、忘れっぽい……まさに、その通り！」

あっははは、と高笑いを続けた。

そんな三郎太を、河童たちはぼんやりとした表情で見上げている。

道連れ

小川に沿って歩いていたら時太郎は、不意に異変を感じて立ち止まった。

尾けられている……！

誰か判らない。だが、確かに後を尾けている相手がいる。微かな気配が、背中に纏わりついているのを感じていた。

「誰だ！ 出てこい！ 尾けてきているのは、判っているんだぞ！」
「がさがさ……と草が掻き分けられる音がして、ぴよこりと飛び出た相手の姿に時太郎は、ぱっくりと口を開けていた。

「お花……！」

ようやく声が出た。

「くくっ！」と、お花は笑った。

「時太郎って、勘がいいのね！ 気配は殺したつもりんだけどな

あ……」

「な、な、な……なんで……」

あまりの驚きに、うまく言葉が出てこない。お花は、わざと顔を顰^{しか}めて見せた。

「あんたが心配だったからよ！ 今から行く所、知っているの？」

「知ってらあ！ 天狗の住んでいる苦楽魔^{くわくま}だ！」

「で、あんたは、天狗と会ったことあるの？」

お花の質問に時太郎は押し黙った。が、気を取り直して、逆に聞

き返す。

「お花のほうこそ、どうなんだ？」

ふん、とお花は横を向く。

「そりゃ、あたしだって、会ったことないわよ。でも、あんた一人で天狗に会いに行つて、それから先どうすんの？」

「そりゃ……」

うぐつと言葉に詰まった。

「ほうらね！」と、お花は得意げに、時太郎の顔を覗きこんだ。

「あんた、のこのこ天狗の所へ出て行つて、自分は河童淵から来た時太郎です。母親を探すため、仲間が必要なんですって、言つの？」
立て続けに捲し立てられ、時太郎はたじたとした。お花がこうなると、いつも時太郎は言い負かすことなどできない。

「いけないか？」

「馬鹿ねえ……」

お花は、ころころと、いよいよ可笑し^{おか}そうに笑い転げた。

「いくらあんたが、河童の時太郎って威張ったって、相手は信じないわよ。誰がどう見たって、あんたは人間の男の子だもん」

「お花まで、そんなこと言つのか？ おれは河童だぞ！ ?土掘り？なんかじゃ……」

かつとなつた時太郎の唇に、不意にお花は宥^{なだ}めるように、指を押し当てた。

「そこまで！ 何かあるとあんた、いつつも馬鹿の一つ覚えみたい

に、同じこと言っただから……！ まあ、このお花ちゃんに任せなさい！ 悪いようには絶対しないから」

「任せろって、どういうことだよ」

「あたしが、一緒に行くってことなの！」

驚きに、時太郎は思わず仰け反った。腰を抜かしそうになる。

「お花！」

ぐつと、お花は覆い被さるように近寄った。

「いいわね？ 時太郎。とにかく、あんたはあたしが目を離すと何をするか判んないから、あたしが従いていってあげるって、言ってるのよ！」

まるで小さな子供に言い聞かせるように、ひと言ひと言はつきり区切って話しかける。

時太郎は言葉を失い、硫黄泉に茹で上げられた鯉のように、口をぱくぱくさせた。

お花は、さつさと先に立って歩き出した。

立ち止まり、半腰抜け状態で動けないでいる時太郎を振り返る。

「なに愚図愚図ぐぐしてんの？ 苦楽魔くらくまに行くんでしょ？」

道連れ（後書き）

第二部の終了です。次回から、第三部の『天狗の章』に続きます。時太郎は、天狗の里で、仲間を見つけられるのか？ 母親はどうなっているのか？ お楽しみに！ それと、そろそろ誰か、感想など書き込んで欲しいのですが……。駄目？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2739n/>

河童戦記～時太郎の章～

2010年10月12日18時11分発行